

## 『源氏物語』成立の真相・序

紫式部、具平親王家初出仕説の波紋

紫式部の人生において『源氏物語』製作に関わることで、二度の転機があったのではないかと思われる節がある。一度目は道長家への出仕で、これは言うまでもなく『源氏物語』製作を本格的に始動させる転機となっていた。そして、二度目の転機は、『源氏物語』正篇成立後、続篇として構想していた「宇治十帖」執筆の一時的頓挫であった。

これら二つの転機のいずれにも中務宮具平親王家が関わっていたのではなかったかとする見通しが、本稿の最終目的とする「宇治十帖」成立の真相を明らかにしていくことにつながっていると考えている。

ところで、村上天皇第七皇子である具平親王を紫式部の想い人とするこ  
（注1）  
 とで『源氏物語』成立の謎を解き明かそうとした近藤富枝『紫式部の恋』  
 （講談社、平成4（一九九二）年。のち河出文庫、平成23（二〇一一）年）は、研究論文  
 ではないものの、学界に衝撃的なメッセージとなったようだ。

例えば、『源氏』研究者のひとりである加納重文「紫式部の恋」（むら

さき」48、平成23（二〇一一年12月）は、父為時に随伴しての若き日の越前下向に際し、形象化された恋の不如意に基づくらしい都への思いを吐露する詠歌（『紫式部集』20（21番歌）<sup>注2</sup>）が、帰京後の藤原宣孝との結婚に自然と結びつかないからといって、それが式部の心に深く秘められた切ない感情の相手として具平親王を析出するだけの論拠に欠ける点で、たとえ若き日の式部に切実な恋慕の相手がいたとしても、その名を挙げ得ないとして次のように述べている。

近藤氏が具平親王という存在を指摘されたのは、原初的な課題についての発言として、私は評価したいと思っているが、これが通説として学界に認識されるとは言い難いように思われる。近藤氏の責任というより、学界がこういう本当に必要な課題に、専門の立場で態度を示すというようなことに、はなだ鈍である結果としてある。(傍点久下)

進化しない閉塞的な学界に責任を転嫁するような加納氏の発言に失望せざるを得ないし、また紫式部の作品に若き日の恋の挫折が深く底流しているとする認識を掲げる前に、式部と具平親王家との深い関わりの可能性をあらゆる視点から探るべきで、それらの博引傍証がある一定方向を指示す

久下裕利



るものであるならば、それは揺らぎのない仮説となって、のちに真摯な研究者たちの検証を経て、通説となって結着するはずであろう。

## (二)

しかし、こうした加納氏の躊躇と懸念は既に無用であって、従来から指摘されている「藩邸旧僕而已」<sup>注3)</sup>〔『本朝麗草』下・懷旧部〕とする父為時をはじめとして伯父為頼<sup>注4)</sup>など親類縁者と具平親王家との親交をおさえた上で、藤式部という女房名での宮仕えを想定できるのは、為時が花山朝永観二(九四)年から寛和一(九六)年にかけて蔵人式部丞のち式部大丞〔『小右記』『本朝世紀』〕であったゆえの命名によると考えられるとし、その出仕先を具平親王家と見定める蓋然性を言う福家俊幸「紫式部の具平親王家出仕考」〔『中古文学論攷』7、昭和61(一九八六)年10月〕が近藤説に先行して学界に公表されていたのであった。但し福家論考では紫式部が心に秘めた憧れの貴紳としての具平親王の存在を指摘している訳ではなかった。

また福家論考と同時期に徳満澄雄「紫式部は鷹司殿倫子の女房であったか」(九州大学「語文研究」62、昭和61(一九八六)年12月)が、従来から知られている『紫明抄』に掲げる系図の「紫式部」傍記に「従一位源倫子家女房／相縫与侍上東門院」とあることや『河海抄』「料簡」の「紫式部者、鷹司殿<sup>従一位倫子、一官女也。</sup>相繼而陪侍上東門院」を根拠として本格的な論証を加えたのであった。道長正妻倫子の女房であったということは、近時においては陽明文庫蔵伝藤原為家筆『後拾遺和歌抄』勅物に「従一位倫子家女房」<sup>注5)</sup>と記されていることから容易に確認でき、彰子に仕える前に倫子家女房とする無視できない一項が浮上しているのである。

徳満氏は『紫式部日記』にみえる式部の新参意識を倫子付き女房集団か

ら彰子付きの女房集団に配属を転換させられたためとするが、『日記』に二つの集団認識は記されておらず、時に内裏女房と道長家の女房たちとしての隔意をうかがわせているにすぎない。むしろ寛弘五(一〇〇〇)年、敦成親王誕生時においても中宮彰子付きの古参女房には一条天皇母后であった東三条女院詮子(長保三(一〇〇〇)年十二月崩御)の影響下に陪侍した女房たちが多く居て、女方にあっただろう倫子の中宮女房採用権ないし人事権もようやく機能し始める時期となっていたことは確かだろう。<sup>注6)</sup>

また徳満氏は式部の出仕時期を、永延元(九七)年十二月十六日〔『台記別記』〕、左大臣源雅信女倫子と摂政藤原兼家男道長とが結婚するに際し、倫子付きの女房として十八歳で出仕したとする。そうだとすれば、為時が長徳二(九七)年正月の除目直物でいったん下国の淡路守に決まっていたのを、道長が為時の再度の申し文(官職申請書)に感動して俄に大国である越前国に振り替えたとするのも、単に為時の文才(「苦字寒夜紅淚霑」襟、除目後朝蒼天在「眼」)に感動してのことではなく式部の功績(『源氏物語』を斟酌してのこととすれば、為時優遇も容易に理合できるといえるのである。ただこれも長保元(九七)年彰子(十二歳)入内以降に具現化する道長の特異な文治政策の嚆矢だということであれば、「好文の賢皇」〔『権記』〕であった一条天皇に取り入る方策の一つであったかも知れないのである。<sup>注7)</sup>

## (四)

そこで、紫式部が具平親王家に初出仕したのではないかとする蓋然性と、またそれと連動していつ頃の時期、つまり式部が何歳頃の事であったのかを問うと、父為時との関連から、為時が寛和二(九七)年六月式部大丞の官を退き、長徳二(九七)年一月、越前守に任ぜられるまでの一条朝に入



ってからの約十年に及ぶ散位不遇時代に相当するのではないかと推断される。

福家・近藤両氏とともに『紫式部集』(1)番歌詞書に記す「早うより童友だちなりし人」を根拠に女童としての参仕をまず考えている点共通するのだが、それが一時的な宮仕えであるならば、はたして女童の時期に藤式部の伺候名を拝しての参仕であることには疑問を禁じ得ない。<sup>注(8)</sup>それならば、『紫式部集』(15)番歌の詞書に実姉の死後、紫式部が姉妹の契りを結んだ女友達とお互いに「とをき所へ行き別るる」こととなるが、この女友達である「にしのうみの人」(16)番歌詞書は、(6)番歌の詞書「筑紫へゆく人のむすめ」とある親類縁者を想定できる友とは違って、宮仕え時の親交が縁となって姉妹の契りを結ぶまでに深まった式部と同じ受領国司の娘同士の離別歌の悲哀となっていると理會したいところである。<sup>注(9)</sup>

式部出生年時説の幅(天禄元(970)年(注10)元元(978)年)にも左右されるが、大略二十歳前後まで宮仕えしたとしても矛盾するところはなからう。つまり、具平親王家への宮仕え説を肯定するにしても一時的と認識する説が大半だが、女童から一人前の女房として藤式部の名を与えられる状況まで短くとも五、六年に及ぶ期間に、女童時代の友を含めて、こうした友との親交を培い、一方で主家具平親王に対する尊敬と憧憬の入り混じる思慕の念を育んでいったとしても不思議ではなからう。

そう思わせるのは、この都を先に旅立った親しい友との別れがあったにも拘らず、越前下向時の詠歌である前掲『紫式部集』(20)番歌の「立ち居につけて都恋しも」や(21)番歌の「汝が思ひ出づる人や誰ぞも」が、都を旅立つ者の常套的な望郷の念とか心細さとは異なって、式部の内奥に秘められた特定の人への執着の吐露と判断されるのは、近藤氏ならずとも無理から

ぬ理會といふべきであろう。またそこに複数の妻がいながら式部に言い寄る宣孝のうさん臭さなどが入る余地は全くないといえよう。

## (五)

しかも『紫式部集』には長徳四(914)年の帰京後、それも既に夫となつた宣孝の没後(長保三(1021)年没)のことらしいが、次のような歌が載っている。<sup>注(11)</sup>

(イ) 八重やまぶきをおりて、ある所にたてまつれたるに、ひとへの

花のちりのこれをををこせ給へり

おりからをひとへにめづる花の色はうすきをみつうすきともみず(陽52)

(ロ) 「ものや思ふ」と、人の問ひたまへる返事に、なが月つごもり

花薄葉分けの露やなにかく枯れ行く野辺に消えとまるらむ(実97)

わづらふことあるころなりけり

両歌の詞書に敬語があるところからすれば、文通相手が高貴な身分の人であることが知られる。そして、この寡居期に道長家から女房として招く打診があり、式部はそれに応じるか迷い苦慮していた時期とすれば、寛弘二(1005)年<sup>注(12)</sup>十二月二十九日(『紫式部日記』)の道長家への初出仕にむけた同年の晩春が前歌(イ)で、晩秋が後歌(ロ)と考えてもそれ程的外れでもなさそうな歌意となつていよう。

そして、この高貴な相手がかつて出仕していた具平親王か、これから参仕することになるかもしれない道長の正室倫子なのか、ここが大きく分かれる点である。南波浩は両歌とも式部が倫子にとって勸修寺家の系譜にあ



る「またいところ」であった点を力説するが、前者(イ)は長年の親愛を含意する八重山吹を贈った式部に対して、散り残った一重の山吹を送り返してきた尊貴な人の詠であって、下句「うすきをみつつつうすきともみず」は、一重だからと言って愛情の薄さは見えないとする。八重山吹の意図が笹川博士の指摘する『惟成弁集』『道綱母集』等の例から「会いたい」意思を表わすとすれば、<sup>注(14)</sup>倫子にとっては願ってもないことと受け入れるはずである。もっとも南波氏は式部の亡夫宣孝も倫子にとって「またいところ」であったところに、「式部が夫を偲ぶ私情を訴えることが許されたのではないか。」(三〇五頁)とみて、縁者同士の絆を確認する読みを示す。

一方、尊貴な相手を具平親王と積極的に捉えるのは後藤祥子で、(イ)「ある所」に訴えたのは、夫宣孝の死による心細さや頼りなさへの慰撫ではなく、「相手が近頃の彼女に志の「うすさ」を感じるような情況に対して、釈明の必要があったからではないのか。」として、次のような推察を果敢に示した。<sup>注(15)</sup>

世が世なら親王家に出仕しておかしくない関係を措いて、中宮後宮への出仕が具体化してゆく中で、式部は親王家への変わらぬ志と、にもかかわらず家運挽回を賭けて心ならずも節をまげる現実をそれとなく訴え、親王家もそれを諒とした。出仕にまつわる懊悩に先立って他人歌のみで構成された段の置かれる意味を、ひとまずこのように見たい。

後藤氏は式部が親王家に宮仕えに出ていた経歴を前提としていないようだが、いくら父為時や伯父為頼が長らく親交を重ねていたからといって、式部自身が一面識もなければ、余りにも唐突な八重山吹の献上であったろう。しかもこの八重山吹を曾祖父中納言兼輔邸以来堤第の庭前に変わらず

咲く花として贈る意図があるからこそ、<sup>注(16)</sup>「式部は親王家への変わらぬ志と、にもかかわらず家運挽回を賭けて心ならずも節をまげる現実をそれとなく訴え、親王家もそれを諒とした。」とする理会に至ることができよう。

そこで後者(ロ)だが、親王が式部の道長家への出仕を「うすきともみず」と諒としたはずなのに、式部は依然と悩んでいたのだとおぼしい。詞書の「ものや思ふ」とは、周知の平兼盛詠「忍ぶれど色にいでにけりわが恋はものや思ふと人の問ふまで」(『拾遺集』恋一・六二二)に拠る表現で、恋の悩みと見立てての洒脱な問い掛けだが、式部の方は相当深刻な状態に陥っていたことが後文から知られる。

南波『全評釈』は敬語使用は宮仕え前では倫子が「唯一人」として頑なだが、前歌(イ)とともに後藤説に傾く笹川『全釈』は、当歌の「枯れゆく野辺」と表現する歌を届けた相手は、「鹿のすむ尾上の萩の下葉よりかれゆく野べもあはれとぞみる」(『新千載集』秋下・五二六。傍点久下)と詠んだ具平親王との可能性をあらためて指摘する(二八三頁)。要するに寡居期において道長家からの出仕の誘いがあり、具平親王家との関わりから躊躇していた状況が浮かび上がってこよう。しかし、この時期、このような手紙のやりとりを終始しているところを見ると、式部が具平親王家に参仕していたとは思われないから、どのような関係性が持続していたというのだろうか。

## (一六)

そこで、『紫式部日記』寛弘五(一〇〇八)年十一月、中宮還啓時の御冊子作りの任から解放され、里下がりした時の次の回想に注目されよう。<sup>注(17)</sup>



見どころもなき古里の木立を見るにも、ものむつかしう思ひみだれて、年ごろつれづれにながめ明かし暮らしつつ、花、鳥の、色をも音をも、春、秋、行きかふ空のけしき、月の影、霜、雪を見て、そのとき来にけりとばかり思ひわきつつ、いかにやいかにとばかり、行末の心ばそさはやるかたなきものから、**はかなき物語**などにつけて、うち語らふ人、おなじ心なるは、あはれに書きかはし、すこしけ遠きたよりどもをたづねてもいひけるを、ただこれをさまざまにあへしらひ、そぞろごとにつれづれをばなぐさめつつ、世にあるべき人かずとは思はずながら、さしあたりて、恥づかし、いみじと思ひしるかたばかりのがれたりしを、さも残ることなく思ひ知る身の憂さかな。

ころみに、**物語**をとりて見れど、見しやうにもおぼえず、あさましく、あはれなりし人の語らひしあたりも、われをいかにおもなく心浅きものと思ひおとすらむと、おしはかるに、それさへいと恥づかしくて、えおとづれやらず。

(二六九―一七〇頁)

引用本文の前段「年ごろつれづれにながめ明かし暮らしつつ」以下「のがれたりしを」までが、道長家出仕以前の寡居期の回想ということになる。その文中に位置づけられた「**はかなき物語**」は、あくまで所在なさを慰める具として物語愛好家が、あの物語この物語と筋の展開、作中人物の好感そして場面の情趣性などを友（親類縁者の同年輩は二の次）と意見交換をして、物語談議に興じたことが知られる。

その物語が式部自作の物語であるとは判じ難い文脈なのだが、引用の後段における里居に置かれた「**物語**」の再出で、前段の「**はかなき物語**」が「あはれなりし人の語らひしあたり」によって捉え直された時、かつての論評が自作の物語にむけられた論議であった可能性が浮上して、「おなじ

心」の親しい友と語らって純粹培養した物語が道長家という権力機構の中核への宮仕えによって変質した、いわば政治利用されたがため、「われをいかにおもなく心浅きものと思ひおとすらむ」と、自省自壊していく経緯がこの引用本文には叙べられているのだと理會されよう。

この述懐が大きな仕事を終えた後の脱力感ではなく、物語作者として屈辱的な虚脱感に襲われて、「残ることなく思ひ知る身の憂さかな」との感懷に至っているのだと思われる。

## (七)

さて、掲出した『日記』の真意については、後述することになるが（本稿ではない）、いまはこの「**物語**」が式部の自作物語であるならば、それは『源氏物語』に違いなかうし、またそれならば献上される豪華な浄書本なのではもちろんなく、作者の手持ちの原本そのものであり、しかも浄書作業から除かれ実家にうち置かれてあった物語であったのかも知れないということである。それが道長家出仕以前に書かれた「**物語**」であり、先のような感懷を誘発したのであれば、それは『源氏物語』のどの部分であったのかということになり、それを言い換えれば、式部はいったい『源氏物語』のどの部分から書き始めていたのかということにもなるう。

宮仕えから退いていたとはいえ、前掲『紫式部集』(イ)回から想定される具平親王との交渉の持続は、式部の才能を見抜いていた親王が、寡居期のつれづれに物語創作を勧め、それを支援する状況にあったとも考えられ、福家論は料紙の供給なども含め経済的支援が具平親王家側から常にあったことを示唆する。さらに『紫式部日記』の前掲記述にあった「あはれなりし人」が「具平親王家出仕時代の同僚女房」（福家）であった可能性を考



える時、「物語」内容の具体相が具平親王家とも関わりのある話題であるならば、たとえ同僚の「おなじ心なる」人であったとしても、その「物語」をもってしての道長家への宮仕えが式部から離反しかねない内容を孕んでいたとも察せられよう。

そうした場合の「物語」は『源氏物語』のどの部分であったのかを問う時、献上の浄書本が相当する巻々と表裏の関係であったかもしれないのである。

近藤氏は、紫の上系十七帖が『源氏物語』の最初の形態とする武田宗俊の玉鬘系後記挿入説を前提<sup>(注18)</sup>にしているらしいし、献上本が桐壺巻から藤裏葉巻までの紫の上系十七帖であったと主張する。しかも『源氏物語』第一部から紫の上系十七帖が選出された訳ではなく、寛弘五(一〇八)年十一月の御冊子作りの時点では、いまだ玉鬘系十六帖は完成されていなかったという認識を示す。では玉鬘系の巻々の成立時期は何年なのかというと、武田説は「玉鬘系は紫上系完成後五六年以上をおいて寛弘七八年以後の作と見られる。」とし、近藤説は具平親王との関係を重視して、おおよそ以下の理由から具平親王薨後、つまり寛弘六(一〇九)年六月以後の作であるとする。

①玉鬘系の巻々に限って奔放な光源氏(具平親王をモデル)を描写する執筆態度に変わることを。

②受領階級の話が占める比重が多くなることを。

③紫の上系と齟齬のある描写があることを。

④行文に洒脱さが加わり、ユーモアも深まること(異筆〈弟惟規〉の参加がうかがわれる)。

⑤夕顔の死は具平親王の愛人大顔の死と似ていて、具平親王への配慮が失くなった時期が考えられること。

紫の上系と玉鬘系との差異については、武田論でもその基幹となる玉鬘系の主要人物が紫の上系には登場しないということの他にも、「文章・説話構成の功拙、描写の粗密、人生洞察の鋭鈍等から二つに区分せられ、それが紫上系、玉鬘系との区別と一致する」(新字体に改めた)<sup>(注19)</sup>との指摘を加えて、玉鬘系十六帖の一括した後記挿入を主張している。それに近藤説が、かつての主家であった具平親王への遠慮、顧慮を排しての物語創作という別の新たな視点を付加することで、いっそう玉鬘系十六帖の一括後記挿入の確実性を増すことになっていると思われる。

しかし、玉鬘巻以下十帖、いわゆる玉鬘十帖は六条院造宮の内部拡充として夕顔の遺児玉鬘を組み入れて紫の上系との合流を計る点からもその存在意義を明らかにできるものの、帚木、空蟬、夕顔、末摘花、蓬生、関屋の第一前半の四帖とその後日談を含む計六帖に関しては、武田論でも「玉鬘系前六帖は紫上系との接続も不自然であり、説話の筋も判然と区別されて居るので、之が後の記述挿入であることについては、合理的に物を考える人の間には否定しようとする人はないであろう。」とし、その検証のほとんどを玉鬘十帖に絞っている。

では合理的に考えて、何故紫の上系と矛盾することが歴然となるような巻々をあえて後に挿入する必要があったのかという疑問に対しては、武田氏は自問自答しつつも文芸論や思想論に頼るばかりで的確な解答を見出せないでいる。それは、具平親王を物語のモデルや素材とする近藤説でも同断で、単調で平凡な物語に複雑な人間観照や諧謔性を加味して重厚たらし



めようと意図したとしても、それは道長家に男皇子誕生をもたらした成果の後に『源氏物語』をどのような形で収束させようとしたのかの解たり得ず、第二部以降に発展させる要因が紫の上系に比してさらに劣る玉鬘系成立の不透明性であることは明らかなのではあるまいか。

(八)

具平親王家で親しくなった同僚女房さえ離反し友を失う要因となった『源氏物語』とは具体的にどの巻々だったのかを問う時、あえて言えば、それは玉鬘系前半の六帖に関わっているのではないかと思われる、それらの巻々を寛弘六(一〇〇九)年以降の成立として考察から排除してしまうのは訝しさを禁じ得ないのである。そして、もう一つ『紫式部日記』には、道長が嫡子頼通の結婚相手に中務宮具平親王の娘隆姫を考えていた時期の記述に次のようにあることが、式部と宮家との間に複雑な状況を寛弘六(一〇〇九)年以前に既に生じていたことをうかがわせていよう。

中務の宮わたりの御ことを、御心に入れて、そなたの心よせある人とおぼして、かたらはせたまふも、まことに心のうちは、思ひゐたることおほかり。

道長から相談を受けての式部の心境の披瀝「思ひゐたることおほかり」は、道長の高貴な血統を切望する婚姻の思惑、打算を懸念してのこととするよりも、福家氏の言うように宮家と式部との間に「何らかの軋轢が生じていて、それが式部の悶々とした思ひの原因になっていた」と考える方が至当であろう。<sup>注(20)</sup>

つまり、式部の「思ひゐたることおほかり」の一端に、『源氏物語』をもってしての道長家への出仕を考えた場合、それが政治戦略的な紫の上系

十七帖(もはや桐壺巻を起点とする十七帖と言い換えた方が適切かもしれない)の貢献性に引き換え、玉鬘系前半六帖の巻々の軽妙な物語性が近藤氏が⑤で指摘するような後の中書王と知られる博学多才な具平親王の意外な一面を暴露することであつたなら、それこそが宮家との「軋轢」をうみ、友であつたかつての同僚女房までも失う羽目に陥っていたら、いまさらながらの修復は困難であつたろうし、さらには隆姫自身に及ぶ内部情報の漏洩は慎重にならざるを得ないのであろう。それを翻って玉鬘系物語の成立ないし発表時期を具平親王薨後のこととすれば、「思ひゐたることおほかり」に式部が逢着する理由は、別に見出せないのではないかと思われる。

(九)

武田宗俊による玉鬘系十六帖が一括して後記挿入されたという説は、紫の上系十七帖が紫のゆかりを底流させる長篇性に対し、巻ごとに読み切る物語の短篇完結性が趣向となる特性に逆行する指摘であり、例えばそうした視点から物語の本性を捉えた玉上琢彌の説があり、『源氏物語』は最初帚木・空蟬・夕顔と短篇のみの発表であつたとし、その好評を得て後に若紫・末摘花を書き、次に「作者が長編にしたてる決心がついてから」、桐壺が書き添えられたとする。<sup>注(21)</sup>また稲賀敬二は「帚木・空蟬・夕顔・末摘花諸巻は一連の構想下に一群をなし」て成立したとし、「画一的に後記挿入されたとする立場」はとれないとの表明も、玉鬘系の短篇的趣向からすれば、当然の疑問としてあり得べきであつた。さらに近時においては近藤説とは別に、具平親王家周辺サロンでの帚木三帖の成立、発表及び光源氏のモデルとしての具平親王に関して精力的に研究論文を発表しているのが斎藤正昭である。<sup>注(23)</sup>



斎藤氏は和辻哲郎の帚木起筆説を起点として論を展開していくが、桐壺巻で語られる光源氏に対して、帚木三帖の冒頭「光源氏、名のみ事々しう……」と始まる源氏の色好み譚には「両親の悲恋の物語を背負った少年の面影は皆無」だとする現行の巻序の不連続性が、必ずしも成立順序の矛盾を生ずるものではないにしても、斎藤氏が指摘した次の二点は、長篇的構想のもとに成立した桐壺巻と若紫巻とを一括りとし、玉鬘系十六帖から帚木・空蟬・夕顔の三帖を帚木三帖として独立する巻序を想定させる根拠となっている。

(1)「若紫」巻で何の紹介もなく登場する惟光の存在は、「夕顔」巻における彼についての十分な紹介と、その活躍ぶりを踏まえてのものとすることが自然である。<sup>注(24)</sup>

(2)六条御息所は「若紫」巻に「六条京極わたり」と触れられているが、これは彼女が重要な脇役として登場する「夕顔」巻を前提とした記述と見なすべきである。

斎藤氏は巻序として「桐壺」↓「若紫」↓帚木三帖↓「末摘花」を退け、帚木三帖↓「桐壺」↓「若紫」↓「末摘花」を採り、帚木三帖を桐壺巻に先行する巻序としているが、むしろその論の立脚点は、物語の成立、執筆順序を問題にしているのであって、次のような認識に至ることで、成立論においてその検討の緻密性で近藤説を凌駕する可能性があった。

<sup>(ママ)</sup>宮中出仕以前、具平親王をモデルとして親王家サロン周辺で発表された帚木三帖の評判が、摂関家の耳に達して、紫式部の出仕要請となった。「桐壺」巻は彰子中宮を藤壺に見立てる等、道長摂関家を前提として書き起こした物語

であり、以降、『源氏物語』の巻々は彰子中宮サロンで執筆・発表された。

この斎藤論の指摘は、玉上論が想定した物語の成立、発表順序に近似する結果を導き出し、帚木三帖の物語成立とその発表の場を具平親王家サロン周辺と見定めることによって、より具体化した物語の成立事情を組み立て得たということであろう。そして、言うまでもなく武田論の玉鬘系十六帖一括後記挿入説から帚木三帖の切り離しが、道長家出仕以前の寡居期における執筆時期とその成立基盤を具平親王家サロン周辺とすることで可能となり、具平親王の「隠ろへごと」(帚木巻)まで世に喧伝されることになってしまった思いも寄らない物語の流布が、親王家で同僚女房となりその後も親交を深めた友とも前述の『紫式部日記』の記述で明らかのように疎遠となってしまった原因が、主家にとって不都合な色好み譚の披露であったとすれば、少なくとも帚木三帖は近藤説のように具平親王薨後の成立そして発表を憚る必要もなくなるということである。

#### (十)

帚木三帖の成立基盤を視点を変えあらためて言い直せば、それは堤邸に居た紫式部周辺の人間関係や生活圏を素材としているということであり、とりわけ具平親王にまつわる色好みのエピソードとして突出する夕顔怪死事件と雑仕女(大顔)怪死事件(『古今著聞集』卷十三「後中書王具平親王雑仕を最愛の事」との関連が、単なる説話の次元を超えて伯父為頼の長男伊祐の養子となった具平親王の落胤頼成と結びつき、その雑仕女(大顔)が頼成の母であったということであれば、<sup>注(25)</sup>斎藤氏が繰り返し各著書で強調して述べていることにも信憑性が増すだろうが、そもそも具平親王を光源氏の



モデルの一人とする件を含めて角田文衛論を凌ぐ点はないにも拘らず、親王の別邸千種殿が河原院と違って皇室御領でないことや雑仕女（大顔）の怪死が出先の遍照寺であったことなどを問題にせず無批判に踏襲している言述は、逆に具平親王の件を物語の素材の一つとして摂り入れた手法までも懐疑的に捉えかねなくなってしまう。

つまり、いまのところ雑仕女（大顔）怪死事件は、少なくとも廢院での物の怪を河原左大臣源融の亡霊と関連づけ、宇多上皇・京極御息所（時平女襲子）を準拠とする『河海抄』の指摘と並ぶ素材にすぎない。ただそうした作者の卑近な例を撰取する手法に注目してみると、例えば夕顔が廢院へ連れ出された時に言い知れぬ不安感に襲われて詠んだ次の歌、

山の端の心もしらでゆく月はうはのそらにて影や絶えなむ（①一六〇頁）<sup>注(27)</sup>

が、『紫式部集』で式部が夫宣孝の訪れを待ちわびた時の贈答歌、<sup>注(28)</sup>

なにのおりにか、人の返（り）ごとに

入る方はさやかなりける月影をうはの空にも待ちし宵かな（実93）

返し

さして行く山の端もみなかき曇り心も空に消えし月影（実94）

に拠っているのだろうし、また光源氏が夕顔の死を悼んで詠む歌、

見し人の煙を雲とながむれば夕の空もむつまじきかな（①一八九頁）

は、むろんこれも『紫式部集』にある夫宣孝没後に詠んだ歌、

世のはかなきことを嘆くころ、陸奥に名あるところへ書き

たるを見て、塩釜

見し人の煙となりし夕べより名ぞむつまじきしほがまの浦（実48）

を踏んでいることは周知の事例で、まさに物語創作によって寡居期の悲傷をあらためてかみしめている状況が浮かび上がってこよう。さらに付け加えると、(48)番歌の詞書に拠れば「塩釜」の名所絵に触発された詠歌事情が知られる訳だが、その背景に物語の創作事情をも明らかになる式部の生活空間を捉えることができる。

つまり、『伊勢物語』第八十一段（定家本系）や『古今集』（卷十六）の紀貫之歌（哀傷・八五二）<sup>注(29)</sup>によっても塩釜の浦の風景を模した庭園のある源融の河原院を指示し、陸奥の名所絵の中でも塩釜を注視する式部の連想の糸は確かに紡がれていたのだといえよう。

## （十一）

葵巻で齋宮の母で前坊妃としての六条御息所の素性が明かされるまでは、夕顔巻冒頭に「六条わたりの御忍び歩きのこと」と記されるように六条辺りに住む忍び所の貴婦人にすぎなかった。その六条の御方（斎藤）と空蟬や夕顔との恋の遍歴を時間的経緯とともに立体的に位置づけたのは斎藤論の卓越した検証であって、従来藤壺のこととした帚木三帖における四箇所の記述を以下のように見定めている。<sup>注(30)</sup>

○君は、人ひとりの御ありさまを心の中に思ひつづけたまふ。（帚木巻。①九〇頁）

↓左大臣家の姫君（葵の上）のこと

○思ふことのみ、心にかかりたまへれば、まづ胸つぶれて、かやうのついでにも、人の言ひ漏らさむを聞きつけたらむ時、などおぼえたまふ。（帚木巻。①九五頁）



↓六条の御方のこと

○人やりならず心づくしに思し乱るることどもありて、大殿には絶え間おきつつ、恨めしくのみ思ひきこえたまへり。(夕顔巻。①一四六頁)

↓空蟬のこと

○わが心ながら、かかる筋におほけなくあるまじき心の報いに、かく来し方行く先の例となりぬべきことはあるなめり、(夕顔巻。①一六九頁)

↓夕顔のこと

これらの読み解きによって、帚木三帖は藤壺の影を認めることなく、つまり桐壺巻を前提とすることなく存立し、短篇の完結性が保持できることとなる。しかし、この考証が『源氏物語』の成立過程の研究においてどれ程浸透しているかを問う時、呉羽長があくまで藤壺を前提として作者の執筆意識を理會しようとしていることからすれば、<sup>注(31)</sup>いまだ帚木三帖を『源氏物語』の創作基点と捉える考え方は、紫の上系成立を優先とする分析を凌駕するに至っていないといえよう。ともかく藤壺を本文読解に際してどのように位置づけるのかに、このような真逆の対立が学説として成り立ち得る現況であることを認識するにとどめざるを得まい。

とはいえ、斎藤氏のように夕顔巻で六条わたりの女君は夕顔と対比的に描かれていたから、それを受けて若紫巻に「おはする所は六条京極わたりにて」と触れられることで夕顔巻が先行する証左となるのか、逆に呉羽氏のように夕顔の怪死事件を葵巻の生霊事件の反映として「御息所の存在を源氏が意識した上で廃院に住む妖物が物の怪の正体である」とするのか。

それにしても前者については夕顔巻では繰り返し「六条わたり」と記されるばかりだが、若紫巻では諸本とも「六条京極わたり」と、その在所がよ

り具体化され、少女巻の「六条京極のわたり」に、中宮の御旧き宮のほとりを」との表記につながる点は看過できない。

そして、後者に関しても、物の怪の正体を四十九日の法事後の源氏の夢に「かのありし院ながら、添ひたりし女のさまも同じやうにて見えければ、荒れたりし所に棲みけんものの我に見入れけんたよりに、かくなりぬることと思し出づるにも、ゆゆしくなん。」(①一九四頁)とあり、廃院の妖物と源氏は推察し落着している。ここに『新編全集』はその頭注に、次のような解説を付している。

夕顔を取り殺した物の怪の正体は、廃院の怪異をたびたび記すことによって暗示されていたが、源氏はここで院に棲む妖物と推定する。夕顔急死の条の記述では、この魔性のものと六条御息所らしい貴婦人との二重の印象を讀者に強いながら、その謎はここに決着を見る。

「六条御息所」としての造型が、源氏に意識させたのか、それとも讀者に意識させたことなのかどうか物語の文脈に即して言えば甚だ疑わしいはずである。生霊となる六条御息所の実体がいまだ明かされていないことも、六条わたりの女君の気性は夕顔巻に「いとものをあまりなるまで思しめたる御心ざま」と記され、源氏の夜離れの寝ざめに不穏な空気を漂わせていた。こうした設定が夕顔怪死事件の前に定位されていたことをどう考えて、わざわざ葵巻の「六条御息所」に言い及ぶ必要があるのかということである。さて、その「添ひたりし女」が現れた現場は次のようであった。

宵過ぐるほど、すこし寝入りたまへるに、御枕上にいとをかしげなる女あて、「おのがいとめでたしと見たてまつるをば尋ね思はさで、かくことなることな



き人を率ておはして時めかしたまふこそ、いとめざましくつられ」とて、この御かたはらの人をかき起こさむとすと見たまふ。物に襲はるる心地して、おどろきたまへば、灯も消えにけり。

(①一六四頁)

枕元の「添ひたりし女」こと「いとをかしげなる女」の正体が直に明かされることはなくとも、当該場面の直前には念を入れるかのように、夜歩きを心配する父帝への顧慮と六条わたりの女君に対して訪れぬことを「恨みられんに苦しいことわりなり」と、源氏は不埒な行動と認識しつつも、その重苦しさを目の前のあどけない夕顔と比べてしまっていた。この怪異が源氏の良心の呵責のなせる現象ともみられるものの、前掲した源氏の心内からしてそれが尾を引いているわけでもないし、だからといってまた六条わたりの高貴な女君自身の化身とも見られないのは、「おのがいとおめでたしと見たてまつるをば尋ね思ほさで」と、その敬語使用と相俟てあたたかも女主人と源氏との事情に精通する近侍女房のような口吻に「いとをかしげなる女」の正体がかいま見られよう。

そうした点からしても、高橋和夫が指摘した六条わたりの女君に仕える女房の中將の君生靈説に妥当性がある<sup>注(32)</sup>。この高橋説に賛意を示しつつ、「多分に読者の推理に属することで作者の明示があるわけではない」として、某院に住む物の怪説に短篇的完結性に内在する長篇的契機としての位置づけを与えたのは森一郎であった<sup>注(33)</sup>。

当論における森氏の見解自体が多分に〈読み〉の二重構造を指摘しているかのようにも思われるが、あえて本稿の主旨に牽強付会すれば、作者が読者の参画を誘発するよう設置した作意として理會したいところで、道長家の宮仕えが当初その女房集団で孤立した式部の有り様からして、これが<sup>注(34)</sup><sup>注(35)</sup>

それとは異なる創作基盤と享受母体の徴証として考えられ、具平親王家サロン周辺での創作活動とその享受の一端を示す読者である女房参加型物語群の方法として捉えてみたい。

## (十二)

紫式部の物語創作目的やその享受の対象が女房経験をともにしたかつての同僚と寡居期のつれづれを慰めるため、その素材を卑近な生活圏に求めていたことを検討して、具平親王家と式部との接点を探るとともに『源氏物語』創作にどのような形で反映したのかの事例を夕顔巻にほぼ集中して述べてきた。

それは帚木三帖の空蟬物語においても同様で、受領の後妻として紫式部の自画像に最も近い例として空蟬造形が考えられる<sup>注(36)</sup>。斎藤氏が指摘したように、光源氏と伊予介・紀伊守父子との主従関係は、具平親王と為頼・為時兄弟との関係が連想され、式部の生活圏内に物語の素材が求められている。そして、笹川博司に拠れば、式部の母方の祖父為信の家集『為信集』から複数の素材が空蟬物語に採り入れられていることも知られ、特に九五・九六・九七番の歌群から「衣を脱ぎ捨てて男から逃れる女」としての空蟬像の源泉であったことを確認できる<sup>注(37)</sup>。光源氏が「人香」の染み込んだ脱衣(小桂)を持ち帰っていることなどは、夕顔の白扇が「もて馴らしたる移り香いとしみ深うなつかしくて」とあった趣向と同じで、雨夜の品定めの話題を含め受領層の生活基盤から発想されるモチーフと表現方法が主体となって帚木三帖は物語構築されていることは明らかとなっている。光源氏が夕顔の四十九日の法要を終え、夫と共に伊予に下る空蟬には饒別とその小桂を返し、『新編全集』の頭注にも指摘されるように、一連の中



の品の女との物語が閉じられ、創作基盤との離別を象徴するかのような短篇の完結性は揺るぎない。

帚木三帖の次に現行巻序では「若紫」「末摘花」と続くことになる。寛弘二(一〇〇五)年十二月二十九日に十七歳の幼く見える彰子に初お目見えした時に持参した手土産が、この宮家の姫君を主人公にした二巻であったとするのが筆者の推論で、斎藤氏が「桐壺」↓「若紫」を一括りとする巻序を示したものの同氏が挙げた二カ条と帚木三帖からの藤壺排除は、帚木三帖↓「若紫」のみを立証していたはずである。

「思へどもなほあかざりし夕顔の露に後れし心地を、年月経れど思し忘れず」と始められる末摘花巻が後に現実世界に思わぬ混乱を招くことになり、友情破綻を導き、式部に「まことに心のうちは、思ひぬたることおほかり。」との困惑の原因となったのが、夕顔怪死事件にまつわる具平親王に関わる色好みのエピソードの一件だけではなかったとしたら、ことはより深刻な事態となったはずである。

ただこの件は既に拙著『源氏物語の記憶―時代との交差』(武蔵野書院、平成29(二〇一七)年)の「宇治十帖の執筆契機―繰り返される意図―」等に若干述べているが、多少の修正をまじえ『源氏物語』成立論としてあらためて論じることにはしたい。斎藤論とは帚木三帖の創作基盤、目的、成立時期に関しては見てきたようにほぼ一致する見解であるが、それ以後の成立に関しては全く異なってくるだろう。

#### 注

- (1) 博学で風流の士であり後の中書王と言われた具平親王については大曾根章介「具平親王考」(『国語と国文学』昭和33(一九五八)年12月)「具平親王の生涯

(上) (『源氏物語とその周辺の文学 研究と資料』武蔵野書院、昭和61(一九八六)年)

「具平親王の生涯(下)」(和漢比較文学叢書12『源氏物語と漢文学』汲古書院、平成5(一九九三)年)がある。のち三論考とも大曾根章介「日本漢文学論集第二巻」

(汲古書院、平成10(一九九八)年)所収。なお余計なことだが、大曾根先生は久下の卒論『平安後期物語の研究』新典社、昭和59(一九八四)年の副査であった。

- (2) 『紫式部集』20番歌「三尾の海に網引く民の手間もなく立ち居につけて都恋しも」21番歌「磯がくれおなじ心に田鶴ぞ鳴(く) 汝が思ひ出づる人や誰ぞも」

- (3) 為時の「懷中書大王排花閣旧遊詩序」の一節で、この「藩邸ノ旧僕タルノミ」によって具平親王家の家司説が出されることになるが、そもそも「中書大王」は具平親王ではなく、兼明親王とする坂本共展『源氏物語構成論』(笠間書院、平成7(一九九五)年)「具平親王家と作者」がある。

- (4) 角田文衛『紫式部とその時代』(角川書店、昭和41(一九六六)年)に拠れば、曾祖父兼輔の大邸宅堤邸に同母兄弟為頼・為時(母は右大臣定方女)は分かれて住んでいたとのこと。

- (5) 陽明叢書2『後拾遺和歌集』(思文閣出版、昭和52(一九七七)年)

- (6) 久下「大納言道綱女豊子について―『紫式部日記』成立裏面史―」(昭和女子大学「学苑」95、平成29(二〇一七)年1月。のち『源氏物語の記憶―時代との交差』武蔵野書院、平成29(二〇一七)年)

- (7) 『枕草子』三卷本第二九三段には大納言伊周が漢詩文の事などを一条天皇に深更に及ぶまで奏上した逸話が見える。

- (8) 女童は年齢のみによって規定されるものではないが、大略十五歳以下であろうし、当然父為時の官職名式部丞由来の藤式部とは異なる童名が付けられる。『落窪物語』のあこきなどがよく知られ、実社会の例ともども諸井彩子「摂関期女房と文学」(青簡舎、平成30(二〇一八)年)などに詳しい。

- (9) 姉妹を誓った女友達を長徳二(一九六五)年に下向する肥前守平維将の娘とし、



血縁上式部の従姉とする説に角田文衛『紫式部伝―その生涯と『源氏物語』』(法蔵館、平成19(2007)年)「紫式部の伯母と従姉」がある。なお同氏に拠れば幼友達も実方の祖母と式部の祖母とが姉妹であったとする血縁関係上の交際に力点を置く。

- (10) 諸説を検討した伊藤博『源氏物語の原点』(明治書院、昭和55(1980)年)「出生年時と老いの意識」は、岡一男『源氏物語の基礎的研究』(東京堂、昭和29(1954)年)の天延元(773)年説に賛している。中野幸一『新編全集』も天延元年説で、筆者もこれに従う。

- (11) 引用は、定家本系として底本に実践女子大学本を、また古本系の代表として陽明文庫本を使用した南波浩校注『紫式部集』(岩波文庫)に拠る。

- (12) 久下「紫式部から伊勢大輔へ―彰子サロンの文化的継承―」(昭和女子大学「学苑」27、平成30(2018)年1月)で道長家彰子付き女房としての出仕年時を諸説の中で寛弘二(1005)年が最も妥当とした。

- (13) 南波浩『紫式部集全評釈』(笠間書院、昭和58(1983)年)。なお「またい」とは、三条右大臣定方息朝忠の孫女倫子と定方女を妻とした父方の祖父雅正の孫女式部との関係をいう。

- (14) 笹川博司『紫式部集全釈』(風間書房、平成26(2014)年)二〇二頁。

- (15) 「紫式部集全歌評釈」(国文学、昭和57(1982)年10月)

- (16) 伊藤前掲書『源氏物語の原点』「紫式部のふるさと」は、いまや荒れ果てた自邸に「かつて人々の賛仰を集めた「名立たる宿」の不可欠の景物としてのイメージを喚起し得るものであった」として八重山吹を挙げ、その例証に『兼輔集』の「庭に佇みけるに八重山吹の花のもとにて／我が着たる一重衣は山吹の八重の色にも劣らざりけり」を指摘する。ただ当歌は『後撰集』(巻三・春下、一〇八)に拠れば、自邸の八重山吹の詠歌とは言えなくなるものの、親王詠は兼輔の「我が着たる」歌を踏まえているといえよう。

- (17) 引用は、小学館『新編全集』に拠る。

- (18) 武田宗俊『源氏物語の研究』(岩波書店、昭和29(1954)年)「源氏物語の最初の形態」(初出「文学」岩波書店、昭和25(1950)年6、7月)

- (19) 武田前掲書『源氏物語の研究』「源氏物語の最初の形態再論」(初出「文学」岩波書店、昭和27(1952)年1月)

- (20) この福家説に対して新山春道『紫式部日記』の人物関係考―具平親王家の婚姻―(神奈川大学「人文研究」平成20(2008)年12月)は、『紫式部集』(イ)62番歌が主家具平親王が了承しているのに、その女房たちが新たに彰子に仕えることを裏切り行為と見做すことが式部の懊悩の原因ではなく、「親王家があまり望まない藤原氏との婚姻を斡旋させられる立場になった心情を表出したもの」とする。この文脈は道長家への出仕自体を問題にしている訳でなく、また「斡旋させられる立場」になったとも解し難い。斡旋というのは具平親王家に親しく出入りしていた道長の腹心ともいえる行成あたりを使者に立てての交渉を考えたい。

- (21) 玉上琢彌「源語成立攷」(国語国文、昭和15(1940)年4月。のち『源氏物語研究』角川書店、昭和41(1966)年)

- (22) 稲賀敬二「源氏物語成立論の争点」(阿部秋生編『講座日本文学の争点(二)中古編』明治書院、昭和43(1968)年。のち『稲賀敬二コレクション(三)』『源氏物語』とその享受資料』笠間書院、平成19(2007)年)

- (23) 斎藤正昭『源氏物語』始発のモデルと准拠―成立論からの照射―(『源氏物語の展望 第五輯』三弥井書店、平成21(2009)年)。当論考はのちに『源氏物語の誕生―披露の場と季節』(笠間書院、平成25(2013)年)に吸収されている。なお当該著書の前後には『源氏物語 展開の方法』(笠間書院、平成7(1992)年)『源氏物語 成立研究―執筆順序と執筆時期―』(笠間書院、平成17(2004)年)『源氏物語のモデルたち』(笠間書院、平成26(2014)年)がある。

- (24) 武田説への反論とした三宅清「源氏物語の構想」(『東京大学教養学部人文科学科紀要』7、昭和30(1955)年7月。のち『源氏物語評論』笠間書院、昭和47(1972)



う年」に既に指摘がみえる。

- (25) 行成の『権記』寛弘八(一〇二二)年正月某日条に「藤原頼成爲藏人所雑色」の割注に「阿波守伊祐朝臣男、実故中書王御落胤」とある。一方『古今著聞集』では雑仕女の子を土御門右大臣源師房とするが、師房は『公卿補任』に「母式部卿爲平親王女」とし、「尊卑分脈」でも「母爲平親王女」とあり、具平親王の正妻爲平親王女腹である。

- (26) 角田前掲書『紫式部伝―その生涯と『源氏物語』』「夕顔の死」(初出「文学」岩波書店、昭和42(一九六七)年3月)

- (27) 引用は、小学館『新編全集』に拠る。

- (28) 南波前掲書『紫式部集全評釈』の見解。以下の傍線は久下の所爲で両歌の「山の端」を夕顔と式部と判断し、「月影」は光源氏と宣孝を喩えたと解し、表現上の類似のみではなく、男の多情で見捨てられる女という内容的にも近似する状況を詠んでいるとみる。

- (29) 田中隆昭『源氏物語 引用の研究』(勉誠出版、平成11(一九九八)年)「河原院と塩釜と夕顔巻」は、式部の「塩釜の浦」歌は陸奥守として亡くなった伯父爲長(父爲時の次兄)を悲しんで詠んだ長兄爲頼の「磯に生ふるみるめにつけて塩釜の浦さびしくもおもほゆるかな」(爲頼集)と貫之の「君まさで煙たえにし塩釜のうらさびしくも見えわたるかな」(古今集)に拠っているとする。

- (30) 斎藤前掲書『源氏物語 成立研究』「初期の巻々」「帚木三帖の時間的構成」  
(31) 呉羽長「『源氏物語』帚木三帖の構想的位相―「夕顔」巻「おのがいとめでたし」の解に触れて―」(富山大学人文学部紀要)53、平成22(二〇一〇)年2月。のち『源氏物語の創作過程の研究』新典社、平成26(二〇一四)年。呉羽氏は「帚木三帖の記事が「若紫」「紅葉賀」「葵」等の巻の記事を前提にして書かれている」と述べてもいるので、池田勉「源氏物語」「帚木・空蟬・夕顔」三巻の制作過程について」(成城国文学論集)1、昭和43(一九六八)年11月)の流れに添

う見解ともいえよう。

- (32) 高橋和夫「源氏物語・六条御息所論の問題点」(群馬女子短期大学「国文研究」22、平成7(一九九五)年3月)

- (33) 森一郎「源氏物語の二層構造―長篇的契機を内在する短篇的完結性―」(『源氏物語の展望 第一輯』三弥井書店、平成19(二〇〇七)年)

- (34) 夕顔巻で白扇に書かれた「心あてにそれかとぞ見る白露の光そへたる夕顔の花」の「それ」が誰または何を指すのか現在でも議論が絶えないが、側近の女房が代詠(筆跡は夕顔)したとも思われる点も含めて当時においても女房読者層の議論があったことであろう。

- (35) 『紫式部日記』に「物語好み、よしめき、歌がちに、人を人とも思はず、ねたげに見落とさむ者となむ、皆、人々言ひ、思ひつつ憎みしを」とあり、宮仕え当初、先輩女房たちによる式部批判の渦中に身を置いていた。

- (36) 島津久基『源氏物語新考』(明治書院、昭和11(一九三六)年)

- (37) 笹川博司『爲信集と源氏物語―校本・注釈・研究』(風間書房、平成22(二〇一〇)年)。以下は『爲信集』九五・九六・九七番の歌群である。

また、忍びて物言ひし人の見つけて言ひければ、たえて逢はで、物起しに逢ひたりける、衣をひかへたりけるを、脱ぎ捨てて入りければ

いまさらに身のしろ衣賜りておもと犯せる罪は負ひにき(九五)

返し

ひとかたに褌ぎてしかばことせめて罪といふ罪はあらじとぞ思ふ(九六)

又、人をとらへたるに、衣を脱ぎ捨てて入りたるを

つれなきを思ひわびては唐衣かへすにつけてうらみつるかな(九七)